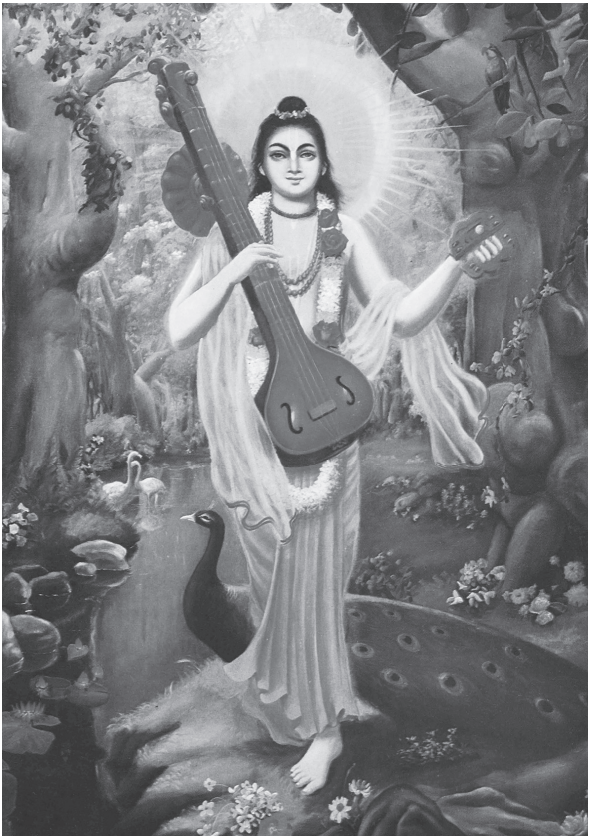
ナーラダ・バクティ・スートラ

信仰の道についてのナーラダの格言集

スワーミー・ブーテーシャーナンダ

日本ヴェーダーンタ協会



聖者ナーラダ

発行者のことば

神を悟るさまざまな修行の中で、バクティ（信仰）の道が、もっとも容易で自然な道であると言われている。バクティ・ヨーガについてはさまざまなヒンドゥ教の聖典があるが、非常に尊敬されたヒンドゥ教の聖者ナーラダによって編集されたバクティの道のスートラ（格言集）『ナーラダ・バクティ・スートラ』が正確さ、容易さ、奥深さにおいて最も優れたものとされている。

ラーマクリシュナ・ミッションの第一二代プレジデントであった敬愛するスワーミー・ブーテーシャーナンダは、一九七八年から一九九一年の間に何度も日本を訪問し、日本の信者にいろいろなテーマで講話を行った。『ナーラダ・バクティ・スートラ』は、これらの訪問の中で説かれ、彼の聖典の深い知識と特別な能力により難解な格言がわかりやすい言葉で説明された。

もともと英語で行われた『ナーラダ・バクティ・スートラ』の講話は、初めにイギリスのヴェーダーンタ協会の隔月雑誌『ザ・ヴェーダーンタ』に掲載され、後に一冊の本として発行された。本書はその日本語訳で、日本の霊的求道者のために発刊された。

翻訳は村椿笙子氏によるもので、村椿氏にはさらに出版費用もご負担していただいた。発行者として彼女の貢献に深く感謝するしだいである。

バクティの道については、すでに協会からスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの『バクティ・ヨーガ』が発行されているが、今回の出版が、この道に興味を持ち、この道にしたがって神を強く愛し悟ろうとするすべての方々に歓迎されることを願うものである。

二〇一五年一一月一〇日
日本ヴェーダーンタ協会

目次

序文　8

ナーラダ・バクティ・スートラ　17

序文

神への愛をどのように育てるか。これは重要な問題だ。やさしくもあり、難しくもあるというのが答えだ。神に祈り、礼拝し、清らかで善良な生活を送っていれば、神への愛を持つことができるとしばしば聞いているので、われわれはそれをやさしいことだと思う。それはとても単純に見えることだが、言うはやすく行うはかたしだ。この考えを実践に移してみると、非常に難しいことがわかるだろう。

神への愛とは何か

まず最初に、神への愛が何を意味するのか理解することが難しいのだ。われわれは、この世のものごとや生きものに対する愛については見当がつく。自分の両親や子供を愛する、夫は妻を愛し妻は夫を愛す。そして富や名声や権力などへの愛もある。われわれはこのようなタイプの愛はすべて理解できる。しかし、神への愛が何を意味するかを理解することは難しい。その理由は、神とどのような関係を持てばよいのかということについて、われわれはこの世でそのような種類の関係を持ったことがないのでわからないことだ。われわれが愛するものはすべて具体的なもので、感覚器官で知覚できるものだ。しかし神はそのよう

なタイプのものではない。もうひとつの理由は、われわれが神の悟りを得ていないことだ。われわれが神への愛について考えるとき、それは現実ではなく、想像の産物だ。悟りや経験という基盤がなければ、われわれは想像することはできないと感じる。だから神への愛という概念を持つことは難しいのだ。

いかにして神への愛を育てるか

その困難さは明らかだが、これを経験した人びとはゴールに到達できる方法を示している。たとえば、シュリー・ラーマクリシュナは「信者は神に対して特別な態度をとらなければならない」と言っておられる。人は神を自分の父や母や子供などのように思わなければならない。そのような二重焼き付けは助けになるだろう。われわれはこのような世俗の人間関係の中での愛はすべて経験している。そしてそれは神に置き換えられるべきなのだ。聖典の中で「『あなた』は私の父、私の母、私の友そして私の最愛の人です。『あなた』は私の富、私の学識そして私のすべてです」と言われている。人間は神に関してこのような概念を持つことができる。つまり「彼」はこの世の中でわれわれのすべてである、と思うことだ。しかし最初はある種の準備つまり想像だけになるだろう。のちに次第に意識が深まってくると、この単なる想像が悟りになるのだ。今日は想像であるものが、明日は悟りになる。それが、いかにして神の愛がはぐくまれるかということだ。この神への愛はバクティあるいは信仰と呼ばれるもので、バクティによって神を得る道をバクティ・ヨーガという。「ナーラダ・バクティ・スートラ」を読むと、神は完全に定義されるものではないことがわ

かる。この信仰は何かへの至高の愛である。

神への愛を育てるための修行（サーダナ）

偉大なものは、簡単にはなしとげられないので、この信仰の道もやさしい道ではない。人生でもっとも価値のある目標である神の悟りは、そんなに容易なことだろうか。実践が必要なのだ。シュリー・ラーマクリシュナがいつも言っておられたように、人は神の御名をくり返し、「彼」の栄光をうたい、聖者と交流しなければならない。これは信仰への準備段階だ。儀式的礼拝や祈りなどはヴァイディ・バクティ（聖典で指示されている信仰の道）と呼ばれる。この準備段階の信仰を通して神への愛を育てるようすは、おもちゃで遊ぶ子供にたとえられる。幼い少女が人形で遊ぶとき、人形たちは彼女の息子や娘になっている。そうやって少女は彼らとの関係を作っているのだ。食事を食べさせ、服を着せ、ベッドに寝かせてかわいがる。もしそれがこわれたりすると泣くことさえあるだろう。

われわれは神の生き生きとした存在を感じるようになるまで、準備段階の信仰を続けなければならない。われわれが神と一定の関係を築き、祈りや礼拝などをしようとこころみても、その途上には内面外面両方の障害物があるだろう。肉欲、貪欲（どんよく）などのような内面的な問題もあるが、適切な場所や助けや協力などの欠除といった外面的な障害もある。

途上にある障害とそれの除去

シュリー・ラーマクリシュナは、信者の心の中に愛が育てば、すべての問題は消えるだろうとおっしゃった。愛というトラは肉欲、怒り、嫉妬などを飲みこむ。つまり強烈な神への愛は、神の悟りの道にあるすべての障害物を取り除くことができるということだ。この世の中には過酷な障害物があると言われているが、それは世の中にあるのではなく、心の中にあるのだ。神への愛が心に育つと、すべての障害物は消え去る。

この神への強烈な愛を、どのようにして獲得すればよいのだろうか。それは、愛と誠実さをもって規則正しく神に仕えることによって得られる。清らかな生活を送っている人の心は神の愛によって次第に色づけされるのだ。家事という義務が、シュリー・クリシュナに会いに行こうとするゴーピーたちを止められなかったように、どのような世俗の障害物もその人の成長を止めることはできない。「バーガヴァタ」は次のような例をあげている。ゴーピーたちが家事の仕事で忙しかったとき、森からクリシュナの笛の音が聞こえてきた。神の呼び声は抵抗しがたいものだった。ゴーピーたちは即座に自分の仕事を忘れてクリシュナのところへかけつけた。その呼び声は彼女たちの心を家事の義務から引き上げたのだ。あるとき、ひとりのゴーピーが部屋に閉じこめられたことがあった。彼女は必死に考えて、自分の肉体がクリシュナのところへ行くことを妨げている障害物だということに気づいた。そこで彼女は肉体を放棄し、精妙体になって主と自己を合一させた。彼女の肉体でさえ、その合一を止めることはできなかった。これが真の愛と呼ばれるものだ。

神への誠実な愛は、信者の人生からすべての障害物を取り除く。M（「ラーマクリシュナの福音［邦訳名］」

の記録者）はあるとき「妻が自分の霊的成長の障害になる場合、どうしたらよいでしょうか」とシュリー・ラーマクリシュナにたずねた。彼はMに「そんな妻はまず説得することだ」とおっしゃった。Mが「もし彼女が自殺をするなどと言っておどしたらどうしましょうか」と言うと、彼は「妻が自分の霊性の生活の障害になることがわかったら、そのような妻は放棄せよ」とお答えになった。それから「人が神への誠実な愛を持っていれば、王様でも不道徳な悪人でも自分の妻でも、すべて自分の思い通りになるだろう」とつけ加えられた。

シュリー・ラーマクリシュナの示唆（しさ）

シュリー・ラーマクリシュナは、信者たちが霊性の道にある障害物から解放されるための示唆をお与えになった。第一は祈りだ。人が神に真剣に祈れば、神はすべての障害物を取り除き、あらゆることを好都合（こうつごう）にして下さるのだ。第二の示唆は、聖者との交流を持つことだ。人の心をより高い霊性の領域に引き上げる人が聖者だ。聖者は神聖さの見本だ。彼らの人生は神の存在の正当性を立証するものだ。そうでなければ人類は霊性の生活に信仰を持つことができなかっただろう。三番目の示唆は、ときどき静かな所で独居することだ。シュリー・ラーマクリシュナはひとつの例をあげておられる。漁師の網につかまった魚のうち、あるものは泥の中にもぐって自分たちは安全だと思っている。そのような魚は漁師がゆっくりと網を引っぱってそれらを捕まえようとしていることを、そして自分たちの命が亡くなることを理解して

いない。網に捕まえられた魚と同じように、われわれの魂は世俗に縛られている。だからわれわれは静かな所に行って人生の目的について考えるべきなのだ。もしわれわれが、この世は実在ではなく、苦しみに満ちているということを経験すれば、それに引きつけられなくなるだろう。霊性の修養は、われわれの世俗への執着をとり除き、われわれの内に神への憧れを芽生えさせるだろう。この憧れが唯一の必要なものだ。「憧れはバラ色の夜明けに似ている。夜が明けると太陽が現れる。憧れののちに神のヴィジョンがくる」とシュリー・ラーマクリシュナは言っておられる。

信仰の道はすべての人のためにある

最後に、この信仰の道はあらゆる人のための道であることを覚えておいてほしい。だれでも実践できる。もっとも卑劣な人間でも、それを始めることはできるし、しだいに改善や進歩が起こるだろう。その愛の性質は、愛する者を清らかにするだけではなく、その人の愛の対象の概念も変化を受けるものだ。その浄化あるいは変化は、ハシゴの一番低い段から一番高い段へと進む。これが、信仰の道の素晴らしさだ。

「ナーラダ・バクティ・スートラ」

「ナーラダ・バクティ・スートラ」は簡素な信仰の聖典だ。これは八四の格言で構成されている。この本

の年代や著者ははっきりしていないが、聖者ナーラダが著者であると言われている。聖者ナーラダは、その信仰で知られている。

バガヴァーン・シュリー・クリシュナご自身でさえ、「マハーバーラタ」のシャンティパルバの中で、ナーラダの資質を激賞しておられる。主はその中で、ナーラダがあらゆる場所であらゆる人びとから礼拝されたことをくり返し述べておられる。ナーラダの一生についてはあまり知られていないが、「バーガヴァタ」の中で、彼の幼少期の話が少し述べられている。彼の父親については何も知られていないが、母親はあるブラーミンの家で召し使いとして働いていたと言われている。たくさんの聖者がそのブラーミンの家に客として集まり、ナーラダは彼らの世話をしていた。ナーラダは客たちによく仕え、同時に彼らの講話も熱心に聞いていた。まだ五才の少年であったが、客たちは彼が熱心な信仰心をもってその講話に参加することをとても喜び、彼に信仰の道を説いたのだ。

しばらくして、ナーラダの母親はヘビにかまれて死んだ。ある日の早朝まだ暗いうちに、彼女はブラーミンの家の牛の乳をしぼりに出かけ、その途中でヘビにかまれて息を引きとった。ナーラダをこの世に結びつける唯一のくさりであった母がこの世を去った後、彼は自分の義務から完全に解放されたことを感じてブラーミンの家を去った。森の中に退(しりぞ)いて、そこで神のヴィジョンを切望して祈った。すると神が彼の前に現れ、ナーラダは神のヴィジョンを得たことを非常に喜んだ。しかし、このヴィジョンはすぐに消えた。ナーラダはその特典を失ったことを深く悲しんだ。そのヴィジョンの再来を渇望して大声で泣いていると、「おまえは今生ではもう『私』を見ることはないだろう。おまえは今『私』のヴィジョンを得たのだから、

おまえの人生は喜びで満たされるはずだ」という神の声が聞こえた。それから後、ナーラダは神の賛歌を歌いながら、人びとに信仰の道すなわち愛の道を説いて世界中を歩き回った。これが「ナーラダ・バクティ・スートラ」の由来だ。

スートラとは何だろうか。それは、短い言葉の中に広大な教えを含む格言的な言葉だ。「パドマ・プラーナ」の中にはひとつの詩があり、そこで「スートラとは、あいまいさやくり返しがいっさいない短い言葉の中に、広大な知識の要点を表すもので、そのようなスートラは代わりになれるものがないし、いかなる間違いもない」と言われている。スートラには糸、つまり主題全体をひとつにたばねる糸という意味もある。特に重要な霊性の理想は、後世まで間違いなく記憶され、維持されるようにスートラの形で書かれた。「ナーラダ・バクティ・スートラ」においても、信仰の道の全体系が八四のスートラの中に説明されている。

われわれはこれから、ナーラダにしたがって信仰の道を学んでいこう。日本のヴェーダーンタ協会に滞在しているあいだに、私は信者たちの要望に応じて「ナーラダ・バクティ・スートラ」についての話をしたことがあった。その講話が録音テープから起こされて、「ヴェーダーンタ」（ラーマクリシュナ僧団の季刊誌）に連載され、イギリスのわれわれのセンターから出版された。オリジナルのスートラと注釈の翻訳を入れた完全な改訂版が、今読者の前に出版されたのだ。

ナーラダ・バクティ・スートラ

バクティ、信仰の道は神の悟りというゴールにつながるもっともやさしい道なので、これを理解するための心の資格を得た後、バクティの意味を説明し、どのようにしてそれを獲得するかについて話してみよう。

一、では、バクティ（神への信仰）を説明しよう。

聖者ナーラダは「さて私はバクティを説明しよう」という格言でこの論考を始めている。彼は、この説明を必要としている特別な人びとに向かって話しかけているのだ。この教えは、それを受けて理解吸収するのに十分な能力のある人びとに授けられるべきものであって、誰にでも無差別に与えられるべきではない。なぜなら、相手を誤るとそれは助けにならないだけでなく、これを嫌う人びとは教師をあざけることもあるからだ。それゆえ、まずこの教えを受けるべき正しいタイプの志願者を選ぶことが必要だ。多くの格言集がほとんどこのような言葉で始まっている。

一番の格言には四つのポイントがある。

（一）何が、ここで教えられるべき主題であるか。

（二）この教えは誰のためのものであるか。どのような人がこの教えを受ける資格があるか。

（三）何が目的であるか。何が望まれている目標か。この教えを学び、実践することによって得られる利益は何か。

（四）この教えとそれに従うことによって達せられるべき目的とのあいだの関係は何であるか。

この聖典の研究に入る前に、これらの予備的な要点や関係が理解されるべきだ。

まず第一に、主題は何であるか。それはバクティつまり信仰だ。ナーラダはこの格言で、信仰とは何かということを述べている。第二に、この教えは誰のためのものであるか。ナーラダは、この道に従って進みたいと願う者たちにそれを伝えようとしている。それは単なる知りたがり屋のためでもないし、知的な思索のためのものでもない。自分の人生をこの教えに従って形成したいと思っている人びとだけが、この教えを受ける資格があるのだ。ここで教えられるものは、人生に特別な重要性を持つものだからだ。これは重要なポイントだ。どのような人がバクティの道に適しているのだろうか。自分の現在の生活状態に満足していない人びとがいる。人生に何かが欠けていると感じてはいるが、どのようにしてその不完全を除けばよいのかがわからない人びと、つまり彼らは何かを探し求めているが、どのようにしてそれを得たらよいかわからないでいるのだ。この論説が役に立つのは、そのような人びとだ。つまり、自分の現在の状態に満足している人びとの心には、学びたいという願望は起こらないということだ。彼らにとっては、どのような教えも無益だ。ゆえに、このような人びとは除外される。これは、この教えを理解するほど十分に啓発されていない人びとはそこから恩恵を受けることはできないということを意味する。この教えに従う能力を持ち、そこから恩恵を受ける適性のある人びと、そのようなある種の精神的準備のできている人びとだけが、この論説の対象なのだ。

ゆえに、特別な精神的準備が必要だ。信仰の道について学ぶために、どのような条件が必要なのだろうか。ただひとつのことが要求される。それは、信仰を得たいという真摯（しんし）な願望と熱意だ。唯一必要とされる資

格は、バクティを得たいという願望だ。それを求める真の渇望がなければならない。求道者は、バクティを得るためにどうしたらよいか真剣に考えなければならない。このような人びとのために、この論説は必要なのだ。

もし人びとが感覚的快楽のたのしみに完全に溺れているのであれば、当然、彼らのハートには信仰への願望は生まれないだろう。そして当然、神の話を聞きたいという気持ちも起こらないだろう。もし人が神を信じないのなら、つまりまったくの無神論者であるなら、この教えは彼を助けないだろう。「ギーター」の中に、この教えは自己を高めるためのいかなる形の修行をしたこともなく、理想実現のためにいかなる形の苦行を実践したこともない人びと、またそれをしようとする傾向をいっさい持たない人びとには与えてはならない、と述べられている（一八・六七）。正しい適性を持つ者だけが、この教えを通して進むことができるということは明らかだ。

それから、ここにもうひとつ大切なことがある。この教えを学ぶ人びとはすぐれた学者である必要はないし、無学の人であってもよい。ヴェーダやその他の諸聖典または哲学に通じている必要もない。バクティ・ヨーガの道を進みたいと思っている人は、社会における特別な地位などまったく必要としないのだ。信仰の道はどのような地位の人でも、あらゆる人に開かれている。学識とか社会的地位といった差別は、この道にふさわしくないし、それをわれわれから奪うものでもない。さらに、年齢は信仰の道を進む基準ではないということもつけ加えておこう。ごく幼いときから神に惹かれる心を持っている人びともいるが、それは彼らの過去世の印象によるものだ。プララーダ、ナーラダ本人、シュカなどは、生まれたときから神

の熱烈な信者だった。犠牲供養の儀式を行う場合は特定の資格（年齢、経験など）が必要だが、信仰の道の場合には必要ではない。非常に倫理的である必要もないし、普通の人間であれば十分だ。感覚器官の楽しみを求める欲望もあるだろう、しかしこの欲望は霊性の生活を続けることができなくなるほど強いものであってはならない。これが、適性の意味だ。

「バーガヴァタ」の中で、「バクティ・ヨギとは誰のことか。バクティ・ヨーガは神のお遊びに惹きつけられている人にとって役に立つ」と言われている。神のことを聞いて、彼の関心は「彼」の中に目覚めさせられている。このような人間は、極端に感覚の楽しみに没入しているわけではないし、最高の放棄の精神を持っているわけでもない。彼はいわば、ちょうど真ん中辺にいる人だ。だから、ただひとつのこと、信仰の道への切望だけが必要とされるのだ。そのような人びとにとって、バクティ・ヨーガは助けになる。

感覚の楽しみに溺れきっている人は、当然神について聞くことを好まないだろう、ということはすでに述べた。また、もし人が非常に浄らかで感覚の楽しみへの執着から完全に解放されていたら、そのような人は知識の道（ギャーナ・ヨーガ）のような他の道を歩むことも適しているだろう。もちろん、バクティ・ヨーガは歩めないということではないが、彼は他の道を歩むこともできるので、彼の行く道はバクティ・ヨーガに限定されることはないだろう。しかし、人がまだ世俗の事物へのすべての執着を避けて、心を「実在」の最高の性質の探求に捧げるほどには浄化されていないという場合には、このような人には、バクティ・ヨーガが助けになるのだ。

ここで、ある疑問が浮かぶかもしれない。もし人が渇仰心を持っているなら、彼はバクティも得ている

わけだ。それならなぜその上にバクティが必要だという議論が起こるのか。彼の渇仰心が浪費されることがないように、正しい方向に導かれなければならないので、そのような信仰についての熟考が必要なのだ。また、彼が誤った方向に進んで、目標を誤るようなことがあってはならない。ゆえに、求道者はどのように前進すべきか、どのような落とし穴があるか、目標は何であるかなどについて、はっきりとした指針を持たなければならない。それだからバクティ・ヨーガの知識が必要なのだ。

バクティ・ヨーガは単に人の知的好奇心を満足させるためのものではない。われわれの生活に関する主題なのだ。もっとも大事なことは、それを頭で考える問題として軽々しく扱ってはならないということだ。例として、ある哲学者の場合を取り上げてみよう。彼は知的満足のために研究する。彼の生活はそれとは無関係だ。彼の哲学はひとつの道、彼の生活はまったく別の道なのだ。高遠な哲学を語る人が必ずそれにふさわしい生活をしているとはかぎらない。大学で哲学を教えている教授は博学な学者ではあるが、これは必ずしも彼がその哲学に従って生きているという意味ではない。そのような哲学者のもとで学んだことがあるのでわかるのだ。彼は非常に博識な学者で、さまざまな難解な問題についてはなばなしく論じていた。しかし、彼の生活はその性質から言うと、平均以下のものだった。それでも彼は名声を得ていた。名声を得てはいたが、彼の生活はその哲学とは何の関係もなかった。

これはナーラダが語りかけるタイプの人ではない。ナーラダは彼の教えによって自分の生活を形成したいと望んでいる人びとに語っているのだ。

ここまでわれわれは最初の格言の中に含まれる二つのポイント（主題と、この教えに適している求道者）

について話してきた。さて、第三のポイントは、この聖典を学ぶ目標だ。この学習によって得られる目標は至高の信仰だ。第四のポイントは関係だ。バクティを求める求道者の場合、それはただこの道と目標を理解することではなく、それに対する至高の信仰を持つことが大切なのだ。主題をただ研究するだけでは不十分だ。信仰の道の知識を得た後、目標の達成のために実践しなければならない。知識の道（ギャーナ・ヨーガ）に関して言えば、自己と「ブラフマン」との同一性という悟りがゴールであり、その過程は識別であると言われている。われわれがこの道について議論するときは、知的な理解があるだろう。一方、信仰の道（バクティ・ヨーガ）は単なる知的な理解では不十分だ。信仰が道であり目標でもあるのだから、信仰の実践がさらに大きな意義を持つのだ。「バーガヴァタ」の中で、信仰の実践を通じて人は至高の信仰の状態に至らなければならないと述べられている。初心者はまず、儀式の道をふくむ信仰から始めなければならないが、最終的には至高のゴールに到達するのだ。なにか信仰に対する魅力がなければ、人は究極的には至高の愛へと成熟する旅を始めないだろう。

Nāradīya Bhaktisūtra

ナーラダ・バクティ・スートラ

信仰の道についてのナーラダの格言集

スワーミー・ブーテーシャーナンダ

2015 年 11 月 10 日 初版第 1 刷発行

発行者　日本ヴェーダーンタ協会会長

発行所　日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1
電 話　046-873-0428
E-mail　info@vedanta.jp
Web　vedanta.jp
FAX　046-873-0592

印刷所　モリモト印刷株式会社

万が一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

©Nippon Vedanta Kyokai 2015, Printed in Japan
ISBN 978-4-931148-57-4